

証し

マイナスの賜物

—病を通して—

R・S

(共同作業所ホサナショッピンググループメンバー)

「すべてのものを御覧になった。それは極めて良かった。」(創世記1:31)

私は現在、平日作業所へ通所し、日曜日は教会へ行くという一週間を送っています。またピアカウンセラーの奉仕をし、当事者活動にもかかわらせて貰っています。

神様から頂いた病（障害）を恵みのプレゼントと捉え、生きづらさを証しすることで、同じ病を持つ人達が生活に活かしてくれればと思います。そうした日々の働きを通して、偏見がなくなり、誰もが住み易い社会への変革がなされればとも願っています。負の財産を社会還元し、人に役立ててゆく過程で、自分の経験も無駄ではなかったと、初めて心の内側から和らいでくる経験もさせていただきました。

他人の悩みを聴いて、自分の何かを“分ける”という行為は、ともすると2-1=1（にひくいちはいち）のように感じられますが、決してそのようなことはありません。役に立つことで低かったセルフイメージがあがり、むしろこちらが助けられているようです。

「目が見えないのは（中略）神の業がこの人に現れるためです。」（ヨハネ9:1-3）

精神科通院を始めた25年前は、多くの人がそうであるように、冒頭の御言葉や前述とかけ離れた所で、「どうして自分の人生にこんなことが・・・」「これさえなければ・・・」という煩悶の毎日であり、まっ暗な心の湖には、怒りや憎しみという決して融けることのない氷がいつも存在していました。特にそれまでの生活でしみついた人間不信は深刻であり、“人は必ず自分を裏切る”という想いは信念化していました。また、それでいて、心の悩み等は目の前の物事を黙々と一つ一つ処理していれば気がついた時にはなくなっているものだ！と考え、自分の努力が足りないから、心が脆弱だからこんな病になるんだと自身

を責め、様々な鍛錬を試み消耗しきってしまいました。そこで初めて「普通の人生の困難ではなく、病気（障害）なんだなあー」という考えにいたりました。障害を認識した瞬間でした。

「主の家にわたしは帰り、生涯そこにとどまるであろう。」（詩編23：6）

そんな私でしたが、教会生活や作業所通所を続けていくうちに、薄皮を剥がすように少しづつではあっても、心に安らぎを覚え、理屈抜きの何か大きなものに包み守られているような気持ちになっていきました。拒否追放されるという根強くあった恐怖感も、「全世界が主の家なのだから、追い出されるという発想自体がナンセンスだ！」と感じ、今でも人を信じられない部分は多くあり、時に厭世的にもなりますが、ともにいて下さる神様と一緒に、たとえ人に裏切られても信じる姿勢だけは失わないようしようという変化が心の内側に広がっていきました。神様の縦の関係とともに、横の関係としてたくさんの根気強く支援して下さる方々との出会いもありました。

疲れた者、重荷を負う者はだれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。（マタイ11：28）

作業所生活では、毎日通うことがよいリズムを築いてくれています。賃金的にはそれほどでなくとも、働いてお金を貰うという社会的仕組みの中に居られるのは、生きる張りとなり感謝です。特に、病院生活が長いと、“鍵がないという事”は新鮮であり、鍵という律法が無い分自律という真の生活を感じます。

恵みは、神様からの一方的なプレゼントと学びました。しかし、障害という枠にいると出来る事まで手をさしのべられて当然という甘えも生じ易くなりがちです。人間の側もおろした重荷の代りに、背負うべき責任を認識し、神様に対し精一杯応えてこそ、恵みの神はより豊かに臨んでくれるものと思います。

これからはその時々出来る事をして、神の栄光をあらわしていきたいと思います。